

Freude

vol. 8-27 2016. 8.24. wed

息子さん使えてよみか?

大阪フロイデ合唱団 Tel 06-6358-2626
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18-4B
ホームページ <http://www.osakafreude.com>
メールアドレス info@osakafreude.com

来年6月21日！ヴィヴァルディは知ってるけどケルビーニって？というアナタへ(◎o◎)！

(と言いつつ、筆者もしらないので、あちこちから資料を引っ張ってツギハギしてまとめてみました。

どうもケルビーニは、ベートーヴェンの同時代、つまり19世紀前半の音楽界においては、「至高にして不滅の存在」だったみたい。下記、ところどころ、資料作成者の主観が入っていますが、ご容赦！



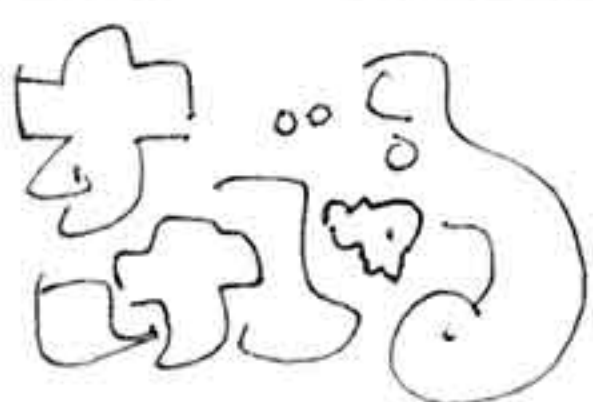
ルイジ・ケルビーニはイタリア人であったが、パリで活躍しパリで没した。

その代表作には「レクイエム 八短調」の他、オペラ「メディア」がある。作曲家としては古典派最後の一人といってもよく、非常に厳密で技巧的な作風で知られる。

ケルビーニは生涯に35曲のオペラの他に15曲のミサ曲(現在は楽譜が残っていないものが4曲、ケルビーニ自身の作品カタログには載っていないがケルビーニの作品と見られるものが2曲、通常文ミサ5曲、戴冠式ミサ2曲、レクイエム2曲)ものミサを作り、個人としても相当信仰心が篤かったと言われている。言葉を先に立てて音楽がつくられており、「宗教を通して音楽を作る」のではなく、「音楽を通じて信仰心を表現する」努力がなされていることが感じられる。

性格が厳格で冷酷でやかまし屋だったため、人柄としては決して好かれるタイプではなかったが(後に出てくるベルリオーズはケルビーニがパリ音楽院長をしていたころの生徒だが、非常にケルビーニを嫌っていた)、その並ぶ者のない技巧は他の音楽家達(かのベートーヴェンもその一人であるが)を感服させ、少なくとも18世紀末から19世紀初頭の音楽シーンでは不滅の巨匠とされていた。(特に混声合唱の八短調レクイエムは、ベルリオーズが激賞したといわれ、また、ベートーヴェンもこの曲を高く評価し、「自分がもしレクイエムを作るとしたらケルビーニのような曲を作りたい」と言ったというのは有名な話。しかし、ベートーヴェンはその完成度に影響されてか、ついにレクイエムを書くことはありませんでした。また、ベートーヴェンは、ケルビーニの荘厳ミサを聴いて、自らも荘厳ミサを作曲したいと思ったとか。ちなみに、ベートーヴェンの葬儀にあたっては正式な葬儀のほかに2回の追悼ミサが行われていて、その1回目にモーツァルトのレクイエムが、そして2回目でケルビーニの「レクイエム 八短調」が演奏されました。ケルビーニが当時いかに高い評価を受けていたかがわかるエピソードですね！)。

→ウラハフツク



8/31(水)

18:30~

堀江パーティ

9/7(水)

18:30~

堀江パーティ

9/11(日)

13:15~

比叟園花会
(朝涼月亭)

9/14

(水)

18:30~

比叟園
(天満)

1760年にフィレンツェで生まれたケルビーニは音楽家の息子として生まれたので、早い内から音楽教育を受けることができた。18才までに36曲の楽曲を作曲しているが、そのほとんどは宗教音楽とオペラで、その2つが作曲の中心であることは、生涯変わらなかった。(通常、ケルビーニを評する際はオペラ作曲家として論じられることが多い) 1784年からロンドンで2年ほど活躍した後、1786年の春からパリに移住したケルビーニは、順調に周囲の評判を勝ちえ、かのフランス革命を乗り越えたパリで1795年音楽院の新設に伴い最高指導部の一人に選ばれる。(ケルビーニは革命以前マリー・アントワネットとも親交があったはずなのだが、どうやら制裁は免れたと思われる。)この時期が彼の人生で最高の時期で、その後10年の間にイギリス・フランスのみならず耳の肥えたウィーンの聴衆にも彼の音楽は受け入れられた。この「聴衆」の中にベートーヴェンやハイドンも含まれていた。

彼の人生は歴史に翻弄されたといえる。

ケルビーニの没年は1842年(81才)だが、この間のパリといえばブルボン王朝→革命政府→総裁政府→ナポレオン時代→王政復古→七月王政、とめまぐるしく権力者が移り変わった時代である。ケルビーニは幸い革命によって影響を受けることはなかったが、ナポレオン時代にはナポレオンの作曲依頼を断ったため一時的に社会的冷遇を受け、その影響力を回復するには王政復古を待たねばならなかった。1795年から音楽院に影響力を持っていたにも関わらず、音楽院院長に就任したのが1821年と遅いのは、そういった事情のためと思われる。

またこの間は音楽史的にも古典派からロマン派への大きなうねりの時代にあつた。晩年の音楽院長時代に於けるベルリオーズとの対決はその象徴ともいえよう。ケルビーニは非常に尊敬されてはいたが、政治的事情から冷遇されている間に時代の音楽の主流からははずれてしまっていた。音楽院長になって以来は、作曲もほとんどしていない。また、本人がロマン派の時代の趨勢を好んでいなかった部分もあろう。

保守的かつ技巧的な作風は、同時代人の評価を得ることはできたが、音楽史にインパクトを与えることはできなかった。歴史に残る、のは、やはり、変革的な役割を果たした人、ということになるとするならば、ケルビーニは、決して革命家ではない。その意味で、ケルビーニは決してポピュラーな音楽家ではないが、その作品の成熟度！完成度！ぜひとも、ケルビーニの音楽がもっと演奏される機会を持ち、多くの音楽愛好家が、彼の存在を知るべきであろう。

ですって！ ちなみに、最も有名な「レクイエム ハ短調」は、フランス革命で断頭台に消えたルイ16世追悼のため、ルイ16世の弟であるルイ18世からの命により作曲され、1817年ケルビーニ自身の指揮によって初演された作品ですが、今回私たちが取り上げる「荘厳ミサ ト長調」は、ルイ18世の戴冠式のための荘厳ミサ曲 ト長調(1819年)なのです。想像するに、ケルビーニはルイ18世と強い関係があつたんでしょね！つまりケルビーニの思い入れたっぷりのミサです！(ラジオで演奏されているのを聴いた由也先生が思わず「これ、ええやん！」と、候補曲に推薦して下さったのですから！)

楽譜の販売を8/31から開始しますよ！

ヴィヴァルディ(カールス版)1400円、ケルビーニ(カールス版)2800円、セットで3200円ぜひ！早めを買ってね！

シュベルト本番に向け2 (今回も) ヴィストは合唱団前、に立ちます。

7/20の並びは

A 21	T3 B3
S9	A11 T2 B3
S9	A11 T2 B3
S9	○○○<ヴィスト T3 B2

オケ
○<かわいい先生

← 可愛い先生
← これも可愛い...
とろとろこれ2、やり始め
する 頑張るかしら!!